

仏教企画通信

発行日 | 令和5年9月1日

73号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

時代の流れのなかで、宗教と信仰のあり方は変容してきた。今、日本を含む世界中で、古来からの宗教はもとより、新興宗教も信者が減っているという現実のなか、私たちはどのように心の拠りどころを見つけていけばいいのだろうか。歴史を紐解きながら探ってみよう。

共同体から個人へと 変容する宗教

日本の仏教をはじめとする宗教は家単位で存在するとともに、村のような共同体のものでもあったが、年々信者の減少を引き起こしている。しかし現在の日本では「あなたの中に隠された能力があり、このカリキュラムに従ってその能力を引き出せば、あなたも教祖のようになれる」といった自己啓発系の新興宗教は例外的に信者数を伸ばしているようだ。これは宗教が個人化している証左といえるだろう。また日常的に経典を読んだり坐禅をしたりはしないまでも、気持ちのなかに仏教がある日本人は多く、身内が亡くなればお坊さんにお経を読

んでほしい、という気持ちを捨てきれない。フランスはキリスト教国だが、カトリック教徒は5%と言われている。週末にミサに出る人もほとんどいないが、教会は街の観光地として存続し、田舎でも教会はコミュニティセンター的な存在になっている。もともとキリスト教は信者でないかぎり、神父や牧師はお葬式を引き受けない。フランスでは葬儀場がないので、家族が亡くなると遺族は近くの教会に頼むことになり、本来はだめだが特別に許可しましょう、というケースが多い。しかしその後、教会に通うことが定着することもない。こうしてみれば、日本のほうがフランスよりもずっと宗教的である

かわりゆく 宗教と信仰の かたち

歴史が語るその変遷

内山 節

といえるだろう。キリスト教も、日本の仏教と同様に共同体のもの、あるいは村の掟のようなもの、として広まっていったのだが、ローマ・バチカンと同じキリスト教にも関わらず、自分たち以外のキリスト教は異端だとして取り締まり、さらに当時の王様が、それを侵略の口実として便乗してきた歴史がある。十字軍はむしろイスタンブールなど東側の国々よりも、こうした侵略を多く行い、ある村では二十万人もの村人を火炙りにしたという研究者もいる。

フランスと同様にスペインでも、カトリックの国でありながら教会には行かない人が多い。しかしその反面マリア信仰は盛んであり、教団のよいうなものがあるわけではないが、無から有を産み出したマリアは、ローマに弾圧された土地神さまのような存在で、街中のいたるところにマリア像が祀られ、皆がお賽銭と蠟燭をつけてお祈りをする。日本という地蔵信仰のよいうものに近いと言えるだろう。

仏と神の存在

日本の神様を語る上では天津神(アマツカミ)、国津神(クニツカミ)という二つの系統の神様がいますが前提となる。一つは天孫降臨系の天津神で、皇室の先祖とされる。天照大神(アマテラスオオミカミ)や須佐之男命(スサノオノミコト)など、人の姿をした人格神がそ

れである。対する国津神は、土地神として山や水などそこらじゅうで祀られている神、つまりはそこに住んでいる人が祀った自然の神である。二つの神の存在は『日本書紀』や『古事記』にも書かれている。降臨した天津神の瓊瓊杵尊(ニギノミコト)は、国津神の姉妹である木花咲耶姫(コノハナサクヤヒメ)と磐長姫(イワナガヒメ)と同時に結婚したものの、イワナガヒメが醜かつたために結婚後に親元に返したという。この国津神の存在については、日本書紀と古事記の制作に地域の有力豪族も参加する、今という編集委員会が存在しており、史実に近いことを書くしかなかったというのが実際のところなのだろう。

かたや紀元五〇〇年くらいに百濟から入ってきた仏教だが、当時は潘神(外国の神)とされ、受け入れるか入れないかについて豪族たちのあいだで論争も起きた。しかしそれまで山の前に鳥居が立っているだけのよいうなものだった日本神に対し、仏像や経典をもつ仏教は、死後を救済してくれる先進文化の象徴のように入ってきて、神よりも上位の存在になっていく。

末法思想が広まった平安時代の民衆説話にこんな話が出てくる。お坊さんが旅先で会った神様に「自分は神に生まれてしまった。神は死んだ後にどうすることもできないが、仏は死んだ後にも導きがある。ついては神様をやめたい」と嘆かれ、気の毒に思ったお坊

さんが、神をやめさせて喜ばれた、というものだ。また伊勢神宮を管理していた神主一族が、死後にどうにもならない不安にかられていた、という記録もある。いずれにしても、人々が共同体の祈りの場を作るなかで、仏教と神は分業されていった。

時代とともに 変容する仏教

生死を超えた何かを内在する象徴だった仏教は、さらに阿弥陀と観音と地蔵というみつつの救済仏信仰を生み出しながらその裾野を日本各地に広げていく。

鎌倉時代には村でお金を出し合って御堂を作ったり、村の代表者が京都に仏像を買いに行くなど、人々が共同で仏像の盗品市場が結構な規模で存在していたため、今も古い地域のお堂に祀られている仏像にとっても立派なものがあったりする。

そのうち「ご利益がある」と信仰を集める仏が出現し、地元以外の人たちもお参りに来るようになる。このような御堂に旅のお坊さんが常駐し、発展して寺になる。パターンが増えていき、江戸時代には現在に繋がる寺檀制度が確立された。寺檀制度が確立された背景には、江戸期は定着民の社会だったことが上げられる。移住者も多かったが、町の商人や職人であれ、百姓であれ、最終的には定着することに目



北アメリカ国際布教 100 周年慶讃法要の様子

布教師たちが紡いできたこの歴史を、共に祝いたいと切に願ったが、改めて五月末にロサンゼルスへと飛びました。

北アメリカ曹洞宗の黎明

北アメリカの歴史は、一〇〇年前に遡ります。当時、ハワイの開教師であった磯部峰仙師が、サンフランシスコで開催された世界仏教徒大会に出席されていた日置仙管長の帰途、ハワイに立ち寄ら

た際にアメリカ本土への開教を要請されたことから始まりです。

二〇二二年、磯部師はハワイでの職を辞して、ロサンゼルスへと活動の場を移し、知人宅の二階を借りて「禪宗寺飯教会」と表札を掲げたそうです。これが、この先大きく発展する北アメリカ曹洞宗の始まりです。

また、ここまで「禪」が広まった大きな因縁として、一九五〇年代以降に日本から赴任した開教師たちの活躍があります。それまでの布教の対

象は、日系人が中心でしたが、鈴木俊隆師、前角博雄師、片桐大忍師をはじめとする開教師たちが、現地の人々に坐禅を教えるようになり、多くの人が参禅するようになり、現在の現地の国際布教師のほとんどは、これら開教師の弟子であり、孫弟子であります。誰もが亡き師の教えをしっかり受け継ぎ、またそれを次世代に継承しています。

そして、教えを受け継いだ彼らは、一般の人々に法を説き、共に坐禅をし、禅を旨とした布教活動をしています。

国際布教師への道

私は在家の出身で、右も左も分からないまま尼僧堂へ飛び込みました。あまりにも無知でしたので、家にあった大声でおしゃべりする目覚まし時計を僧堂に持っていき、早朝から周りを叩き起こしてしまっただけで、今でも笑い話です。

そんな私が、尼僧堂を離れ曹洞宗という社会にでてからというもの、ずつとなんとも感じていた違和感がありました。それは、自分の布教に対する価値観が周りと違うという事です。単に私が変わり者ということもあつたかもしれませんが、その違和感はヨーロッパを訪ねて現地の僧侶と話をしていく中でずつかり消化されました。その時、自分の目指す布教モデルは海外に多くあると理解したので



英訳版『正法眼蔵』出版記念シンポジウムの様子

それぞれの思い
一〇〇年の重み

この度の北アメリカ国際布教一〇〇周年記念行事は、一〇〇周年慶讃法要、瑩山禪師七〇〇回大遠忌予修法要、北アメリカ国際布教没故者諷經、開山歴住諷經、檀信徒施食、英語翻訳版『正法眼蔵』出版記念シンポジウムとたくさん行事が執り行われました。私が個人的に一番印象に残っているのは、北アメリカ国際布教没故者諷經です。法要が始まると、途端に堂内の雰囲気が一気に変わりました。

さっていたことは、私の海外赴任中の出来事の中で最も幸いだったことでした。私は彼女から、本当に多くの智慧と優しさを学びました。

それぞれの思い
一〇〇年の重み

この度の北アメリカ国際布教一〇〇周年記念行事は、一〇〇周年慶讃法要、瑩山禪師七〇〇回大遠忌予修法要、北アメリカ国際布教没故者諷經、開山歴住諷經、檀信徒施食、英語翻訳版『正法眼蔵』出版記念シンポジウムとたくさん行事が執り行われました。私が個人的に一番印象に残っているのは、北アメリカ国際布教没故者諷經です。法要が始まると、途端に堂内の雰囲気が一気に変わりました。

森香有(もりこうゆう)
1986年東京生まれ。駒澤大学仏教学部仏教学科卒業後、愛知専門尼僧堂へ。曹洞宗総合研究センター研修生、曹洞宗宗務行動務等を経て、米洞所在の「曹洞宗国際センター」書記として勤務後に帰国。オンラインのお寺「ぶつだてらす」を運営。



瑩山禪師 700 回予修法要の様子

僧侶として、どのような生き方をするのか、どのような布教をして人々と関わっていくのかということは、私たち僧侶にとって一大事です。自分の目指す布教の在り方を肌身で学びたかった、また、今まで自分が駒澤大学、愛知専門尼僧堂、教化研修所などで学んできたことを少しでも現地に還元できればという思いで国際布教師を目指しました。

北アメリカでは、日本からは想像もつかないほど多くの僧侶の活躍があります。特に、日本との大きな違いはその半分は女性だということです。私の勤めていた曹洞宗国際センターの所長もヒューストン禅センターの代表を勤めるゴッドウィン建仁師で、女性です。彼女が私たちのセンター所長を務めてくだ



曹洞宗国際センター所長ゴッドウィン建仁師と筆者

的があり、移動してはどこかで定住するという生活者が多かった。

しかし明治になって近代都市ができてくると、もともと定着民を軸にしていた寺檀制度の継承が難しくなる。田舎から出てきた一代目は地元への愛着があるが、二代目以降は東京で生まれるなど、結びつきが薄くなるのは時代の必然だったのだろう。それに代わり明治政府は、家を中心とした制度の確立をめざし墓地法を制定する。墓地法では、墓地の所有は祭祀権(先祖の御霊を祀る権利)がベースとなっていて、驚くべきことにそれはいまだ改正されていない。墓地法に基づけば、墓地を継承できる者として認められていくのは長男のみ。現在ではその長男が海外にいたり、その他の親族が管理していたり、家族と入るよりベツトと入りたいなど多様化している。そのあたり、お寺の場合は柔軟に対応しているが、公営墓地の場合は管理者が宙に浮いてしまうため、青山墓地や多摩霊園などは大きな問題に直面している。

天皇と「家の墓」

家単位でくられる現代と異なり、江戸期までのお墓は個人のものだった。田舎に行っても個人の墓ばかり、徳川家康の墓はあれど、徳川家の墓はない。そのため天皇を全国民の父とする国を作ろうとした明治政府は、天皇のこと

をほとんど知らなかった民たちに「なぜ天皇が日本人の大王であり父なのか」を説明するのには苦労した。現実的な歴史においては力の強い人間が王様になってきたのだが、体制側はそう言いたくない。力が弱たら別の人が王様になる可能性を否定できなくなるため、「なるべくしてなった存在」という理屈をつける必要があったのだ。歴史的にはこのような王の定義には、日本だけでなく世界中が困っていた。キリスト教は紀元三〇〇年くらいに生まれたが、神に命じられたという解釈をもって、当時衰退していたローマ帝国がキリスト教を国教化した。以後それを権威化することで、自分の王権を確保するというスタイルがヨーロッパでは通例になっていった。しかし明治までの日本にはそういう絶対的な神がいなかった。儒学を登用することだったので、儒学は天皇による神政の世の中を主張していたため、天皇の登場説明に用いられたのだ。

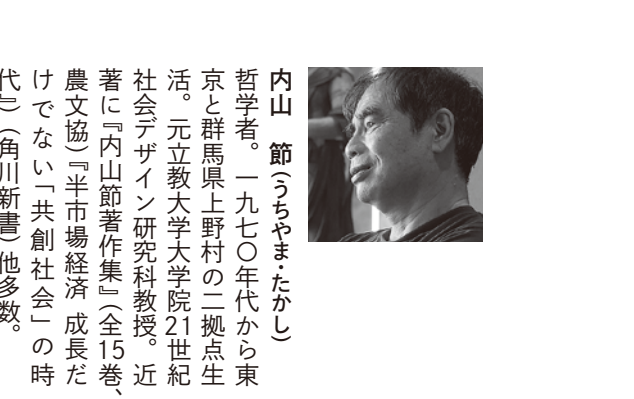
テレビ番組「水戸黄門」で人気の水戸光圀は、儒教を信仰した。誰よりも早く、仏教を邪教とする廃仏毀釈を試みて、水戸領の全寺院の破壊を命じたという。テレビで高らかと笑うあの好々爺とは全く異なる人物なのである。ところがそこで全領民が全藩一揆の構えをし、すべての百姓が総蜂起する気配を見せたため、泣く泣く諦め、大日本史の編纂に取り掛かり、それが幕末明治維新の思想的一端を

支えた水戸学へとつながっていく。

ともあれ、江戸時代の儒学者たちが唱える、伊邪那岐命(イザナギノミコト)と伊邪那美命(イザナミノミコト)がいて、瓊瓊杵尊(ニギノミコト)、天照大神(アマテラスオオミカミ)から、神武天皇へ続く系譜が日本人だという流れを、明治政府がにわか強制したのだから、日本人は全員が源氏か平家か藤原になつてしまった。源氏は清和源氏からの分家、平家は桓武天皇からの分家だから、日本人は全員天皇の親戚だというものだが、同時に先祖神が異なるという理由をつけて、穢多・非人という公式に差別していい人間をも作つたのである。そのような日本人論を国体化したことで、皆が源平の何某という怪しい家系図をもつようになり、天皇制と一体化し、檀家制度とも結びつきながら、墓は「家の墓」になつていった。

原点回帰しつつある信仰の姿

古来から日本の土着信仰では、人は死ぬと近くの山に魂が帰り、穢れが清められるとご先祖になることとされてきた。埋葬は山なので、自宅の近くに仏壇を作つたり、家のなかに仏壇を作つたりと多様化してきた。現代でも、とても小さな仏壇や代わりになるようなものを置く人などもある。いまだ土葬と決められている天皇でさえ、今の上皇は火葬を希望し、さらに夫婦で入り



内山 節(うちやまたかし) 哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』全15巻、農文協『半市場経済成長だけではない「共創社会」の時代』(角川新書)他多数。

一〇〇周年慶讃法要、瑩山禪師七〇〇回大遠忌予修法要、北アメリカ国際布教没故者諷經、開山歴住諷經、檀信徒施食、英語翻訳版『正法眼蔵』出版記念シンポジウムとたくさん行事が執り行われました。私が個人的に一番印象に残っているのは、北アメリカ国際布教没故者諷經です。法要が始まると、途端に堂内の雰囲気が一気に変わりました。

二〇二三年五月二十七日、二十八日に北アメリカのカリフォルニア州ロサンゼルスにある曹洞宗寺院、禪宗寺にて北アメリカ国際布教一〇〇周年記念行事が行われました。私は二〇一八年から二〇二三年まで、曹洞宗の北アメリカ国際布教師として渡米しており、その間、サンフランシスコにある曹洞宗国際センター

の書記として任を勤めておりました。

本来であれば、二〇二二年十一月に執り行われるはずだった一〇〇周年慶讃法要は、新型コロナウイルスの拡大が懸念され、二〇二三年五月に変更されました。私自身は、たつた四年半しか北アメリカにいませんでしたが、その間に見てきた北アメリカの国際

たいと言っているようで、これも墓が時代の変化によって変わるという例である。

自然と生者と死者と神仏が結びついて自分たちの社会は作られていると考え、その中に組み込まれていた願いや祈りは、「信仰」であつて「宗教」ではない。明治以降は、その信仰ですら合理主義のなかで壊されていった。しかし今の若い人たちはそうした合理主義にも疑問をもち、伝統的な自然信仰や死者を大事にするという思いのもと、共同体やつながりを作ることに熱心だ。伝統回帰的な流れとともに、インターネットや最先端技術のAIもある現代において、信仰は、宗教は、寺や墓は、どうあるべきなのか。私たちは再定義する時がきているといえるだろう。

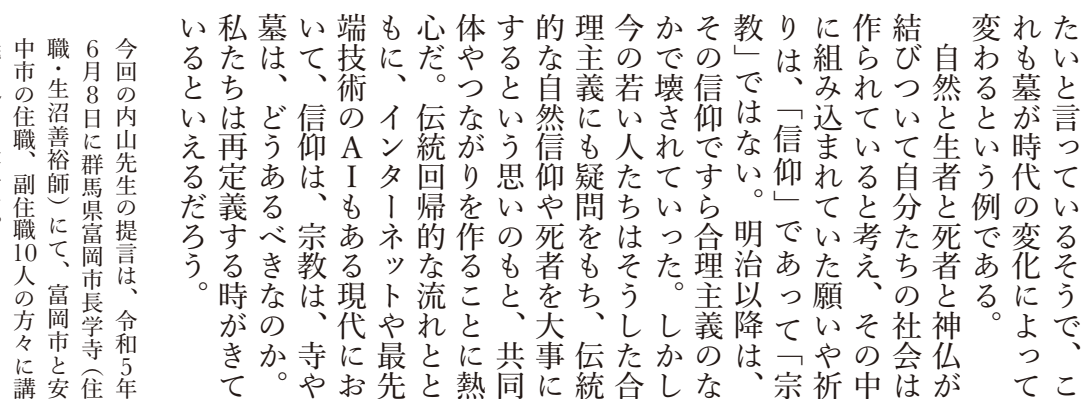
今回の内山先生の提言は、令和5年6月8日に群馬県富岡市長学舎(住職・生沼善裕師)にて、富岡市と安中市の住職、副住職10人の方々に講義された内容です。

一〇〇周年慶讃法要、瑩山禪師七〇〇回大遠忌予修法要、北アメリカ国際布教没故者諷經、開山歴住諷經、檀信徒施食、英語翻訳版『正法眼蔵』出版記念シンポジウムとたくさん行事が執り行われました。私が個人的に一番印象に残っているのは、北アメリカ国際布教没故者諷經です。法要が始まると、途端に堂内の雰囲気が一気に変わりました。

二〇二三年五月二十七日、二十八日に北アメリカのカリフォルニア州ロサンゼルスにある曹洞宗寺院、禪宗寺にて北アメリカ国際布教一〇〇周年記念行事が行われました。私は二〇一八年から二〇二三年まで、曹洞宗の北アメリカ国際布教師として渡米しており、その間、サンフランシスコにある曹洞宗国際センター

の書記として任を勤めておりました。

本来であれば、二〇二二年十一月に執り行われるはずだった一〇〇周年慶讃法要は、新型コロナウイルスの拡大が懸念され、二〇二三年五月に変更されました。私自身は、たつた四年半しか北アメリカにいませんでしたが、その間に見てきた北アメリカの国際



曹洞宗本堂前での記念写真

の書記として任を勤めておりました。

本来であれば、二〇二二年十一月に執り行われるはずだった一〇〇周年慶讃法要は、新型コロナウイルスの拡大が懸念され、二〇二三年五月に変更されました。私自身は、たつた四年半しか北アメリカにいませんでしたが、その間に見てきた北アメリカの国際

の書記として任を勤めておりました。

本来であれば、二〇二二年十一月に執り行われるはずだった一〇〇周年慶讃法要は、新型コロナウイルスの拡大が懸念され、二〇二三年五月に変更されました。私自身は、たつた四年半しか北アメリカにいませんでしたが、その間に見てきた北アメリカの国際

佐々木宏幹著『仏教人類学の諸相』は先生の御誕生日、令和5年5月17日に発刊されたのですが、大事な本ゆえ校正作業が長引き、ようやく印刷会社に入稿できました。遅くなりましたが9月上旬には発刊となります。

佐々木宏幹先生は、その勝れた業績とお人柄から大変な有名人であると存じていましたが、その御高名は私の想像を遙かに超え、宗教界にとどまらず広く轟いていると感じた出来事がありました。

2005年、当時の河合隼雄文化庁長官にインタビューを依頼した時のことです。無名な小誌ゆえダメ元で出した依頼でしたが、なんと秘書官から受けて下さる旨お電話頂いたのです。佐々木宏幹先生がホストの特集ページであったことが決め手でした。

『曹洞禅グラフ』第93号(2005年6月1日発行)に載るその記事を読み返しますと、18年前ですが、現代にも通じる問題が熱く語られています。ここにその全文を再掲いたします。

編集後記

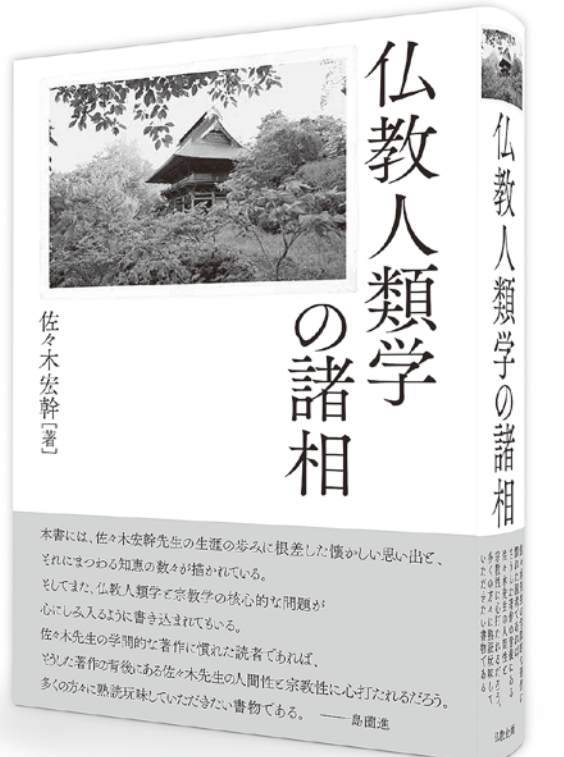
藤木隆宣



佐々木宏幹
駒澤大学名誉教授・宗教人類学者

河合隼雄
文化庁長官・臨床心理学者

2023年9月刊行
仏教企画刊
A5判上製 336頁 本体2,300円+税



仏教人類学の諸相

佐々木宏幹 著

シヤーマニズムの泰斗、90年の思索

幼少期の著者がみつめた 仏教のさまざまな姿を 人類学の視点から叙情的に描きだす



佐々木宏幹 (ささきひろし) 1930年宮城県生まれ。駒澤大学文学部卒業。東京都立大学大学院博士課程修了(宗教人類学)。駒澤大学教授などを経て、駒澤大学名誉教授。文学博士。シャーマニズム研究の第一人者で仏教教理や寺院の実態にもよく通じ、日本仏教文化の諸相に関する論考も数多い。

「本書を推薦いたします」

- 國學院大學教授 石井研士先生
- 駒澤大学名誉教授 佐藤憲昭先生
- 曹洞宗龍泉院東堂 椎名宏雄老師
- 東京大学名誉教授 島蘭 進先生
- 國學院大學兼任講師 高見寛孝先生
- 二松学舎大学名誉教授 谷口 貢先生
- 駒澤大学総長 永井政之先生
- 京都文教大学準教授 林ひろみ先生
- 愛知学院大学教授 林 淳先生
- 国際日本文化研究センター名誉教授 山折哲雄先生
- 曹洞宗教化研修所 薪水会会長 山路純正老師

ハガキ・電話・FAX・メールにてご注文ください。(送料が別途かかります)

仏教企画
ハガキ 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
電話 042-703-8642
FAX 042-782-5117
Eメール fujiki@water.ocn.ne.jp

佐々木宏幹著『仏教人類学の諸相』の刊行を祝して

佐々木宏幹先生は、「自分の幼少期について「宮城県は気仙沼市(当時町)の曹洞宗寺院、少林寺で生まれた私は二歳で住職の父を、三歳で母を喪くして独り子になったので、在(村)にある宝鏡寺の、母方の祖父母に育てられた」と述懐されています(「不思議なことは？」『仏教企画通信』六十号、令和二年六月一日)。

私は石巻市の寺に在籍していますが、十六年前に、奇しくも佐々木先生がお生まれになられた少林寺の、第二十二世橋本厚道和尚が遷化された時、その後継者が決まるまでの三年余りのあいだ、兼務をさせて頂きました。その折に、少林寺には、先生のご尊父様、第十九世悟山秀幸和尚と、若くして亡くなられたご母堂佐々木タカ様の墓所があることを知りました。先生とのご縁を深く感じております。

私は駒澤大学卒業後、曹洞宗教化研修所へ十五期生として入所しましたが、先生はその一期生であり、研修所の講師も務めておられました。その時期は、曹洞宗青年会が各県に組織され、活動として禅のつどいが各地で開催され始めていた頃でした。宮城県でも禅のつどいが、一、二回と開催され始めていた頃で、その法座に参加した人達の疑問や質問に、先生が懇切丁寧に答えておられた様子は、五十年を過ぎた今も鮮明に蘇ってきます。

特に不肖の事ながら、南方仏教の諸相を学びたいとタイ国への留学を希望した際には、先生がその関係寺院の数ヶ寺と連絡・交渉を下ささり、そのお陰で留学が実現いたしました。まさに先生は大恩人なのです。

その後はお会いする機会が余りなく今日に至っておりますが、宗門の機関誌などで先生の論考を拝見しております。特に『仏教企画通信』に連載された諸論考を拝読しますと、宗門の今日的な課題を指摘して頂いていることに強い関心を抱くと共に、寺院のあり方や、日常の活動に指針を与えて下さっていることに勇気を頂いております。そうした僧侶の指針となる内容が掲載された『仏教企画通信』の連載の中から、三十七篇(他一篇)の論考を収録して成ったのが『仏教人類学の諸相』です。人生の指針を与えてくれる本書を、僧侶ばかりではなく、より多くの方に手に購読していただきたく、ここに推薦いたします。

宮城県石巻市 洞源院住職 小野崎秀通 記

今、子どもが危ない 宗教的感性を考える

お坊さんが生きていく姿が仏教だ

文化庁長官として「文化で日本を元気にしよう」と呼びかける河合隼雄氏は、臨床心理学における日本の第一人者。これからの「日本人の宗教性のありかた」を追求する宗教人類学の佐々木宏幹氏は曹洞宗の僧侶でもある。「タバコは吸いませぬ。ぼくは人を煙に巻くほうですから」とユーモアたっぷりの河合氏と、きまじめで直球型の佐々木氏の対談は談論風発。

わたし自身気づいていない日本の文化・宗教のおもしろさと重要さに気づかされて思わず合点。

見えなくなってきた 生と死の境界

佐々木 このところ毎日のようにテレビや新聞で殺人事件が報じられます。若い者だけではなく壮年、老年のひとりも人の命を平気で奪うという傾向があります。そして一方では高齢化社会を迎えて、お年寄りの自殺が非常に多くなっている。昨年の日本全国の自殺者総数は三万四千人だそうです。そのうち六十歳以上の人が一万五百人もいます。一方で人の命を奪うという傾向があり、片一方では自ら死んでいく。これは一体何だろうと思うのですが。

河合 命の大切さというのは、やっぱり心が通じているというものがなくなったら分からないわけですね。機械はつぶし

からたとえば、テレビドラマでも、劇中、俳優さんが死んでもまた別のドラマに出てくる。だから、いつもテレビを見てると、生きた人間が命を失うということの意味を感じることができなくなっている。

佐々木 それを感性のレベルできちつと心の奥底にセットできていないんですね。その背景にはやはり家族、おじいちゃん、おばあちゃんたちのつながりが失われているということがある。たとえば昔でしたら、孫たちが何か悪いことをしてくると、お仏壇の前に引張つていかれて、「おまえがうそをついても、仏さん、ご先祖さんはちゃんと見ていらつしやるよ」と諭された。そういう仏壇のような文化装置が今の家庭から消えてしまったということも、心のつながりを失わせよう大きな要因ではないでしょうか。

河合 昔は生活のなかに文化装置がうまく働いていた。たとえば、「もったいない」なんていうことばですね。わたしの父親なんか、しよつちゅう言っていて、日常生活のなかで知らず知らずのうちに宗教教育が行われていた。ところが、今の子供に「もったいない」ということを分からせることは非常に難しいわけですね。「古くなったものは捨てたい。新しいのを買えば

急速に崩壊して来た 宗教教育のシステム

2024冬・正月号 特集予告

2023年10月30日 発刊予定

曹洞禅グラフ

167号

昭和女子大学総長 坂東眞理子さん インタビュー

- 道元禅師の魅力について
- 今の日本の世相について
- 学生・若者に伝えたいこと

ほか

ばんどう まりこ
 富山県出身。東京大学卒業後に総務省入省。元官僚の評論家。ベストセラー『女性の品格』(PHP研究所)をはじめ著書も多く、近著に『女性の覚悟』(主婦の友社)がある。

手まり学園

寄附者御芳名(敬称略)
 R5.6.1~R5.7.21

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	青木義次(117)	5,000
神奈川県	青木義次(118)	5,000
千葉県	吉岡大龍	3,000
合計		13,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

から自然に出てきた。そういう自然というものを、もう一度何かの形で教育の場に持ってこないか。

河合 そうですね。自然とともに生きていくという感性を日本人は強く持っているわけですね。そういう生の体験をするようなことを、もっとみんな考えるべきだと思います。自然観察ばかりじゃありません。このごろよく小学校なんかでやるようになりましたが、無人島へ行ってみんなお米だけもらって、あとは自分たちで炊いて食べたりするという体験学習がありますね。ああいうのをすると、子供たちは喜んでくれます。そういう感性を子供たちは本来みんな持っているんですから。そういう体験をもっとしたらいいとわたしは思います。ヨーロッパとかアメリカはそれをすでに考えていて、都会に住んでいる子供たちは夏休みに山の家の宿泊に行くのです。そこで思い思いの方法で好きなことをして帰ってくる。わたしは日本でもそういうのをもっとやれ



永平寺玲瓏の滝

ばいと思います。それはもちろん親子で行くのが一番いいが、わりなら夏休みの一週間とか二週間、子供を山小屋なんかで預かってもらって、好きなようにそこらを遊ばせたり、勉強させて帰ってくる。大事なことは、そこにはテレビもゲームもないこと。それが一番大事なんです。今、日本でもその走りみたいなことをやっている人がいます。昔「青年の家」というのがありました。そういうところ、小学校の先生も生徒もいっしょに来てもらう。午前中は学校と同じよう

に勉強をするんです。あとは放課後ですから、みんな好きなように遊ぶ。もちろん、テレビもないし、そして、子供たちは上手に遊ぶそうです。子供同士の対話もものすごい増えるそうです。「あれやって」「これおまえやれ」とか言って。それで山の管理人の人が見えていますから先生には放課後はもうほっとしてもらおう。そうやって一週間もいると、子供たちがものすごく元気になるそうです。だから、そういうことをもつと組織的に考えてほしいと思いますね。

お寺を開放して子供たちに来てもらおう

佐々木 曹洞宗には全国で約一万五千家のお寺があるんですが、そのうち七〇%ぐらいは農山村地域にある。お寺は境内が広くて、緑があつてカエルとかセミとかがいる。そういうところに子供たちを連れて行くといいですね。

河合 そうですね。それで、子供たちには、何もお寺へ来たからといってお参りなんかでよろしいと。

佐々木 そうです。

河合 ともかくそこで好きなことをしたらいいんやとてね。ところがね、お坊さんが朝からお勤めをしておられるら、子供たちは大体みんな来るんです。それがまたおもしろい。あれ、「来い」といったら来ないんですけど、みんな好きにしたらええ、と言ってやっているところ。テレビなしの生活で、山の中でチョウチョとかトンボとか採ったりして遊んでもらう。それで一週間たつたら帰ってくださいます。そうしたなかで、親子で料理するのもよし、精進料理を食べるのもよし、色々な方策を考えてやってみるとか思わんでもいい。「お坊さんが生きていく姿が仏教」なんですからね。

「曹洞禅グラフ」第93号(2005年6月1日発行)より再掲

仏教企画発行の刊行物 (*部数により割引があります) すべて税別価格です

『修証義』解説 丸山劫外著	1,400円*
『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠	1,200円*
『葬送のしおり』 長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著	500円*
『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説	300円*
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 靈元丈法著	140円*
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 靈元丈法著	150円*
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著	500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著	2,300円
『仏教人類学の諸相』 佐々木宏幹著 7月上旬刊行予定	2,300円

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ	
発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。